

研究ノート

鈴木法を基盤とした TAT の分析・解釈

鹿児島大学教育学系 関山 徹

Introduction of a TAT analysis method developed by Suzuki

SEKIYAMA, Toru (Kagoshima University)

There are three main features of the Thematic Apperception Test (TAT) analysis method developed by Suzuki (1997, 2012). The first is that it is processed based on the classification tables of the typological story plots of each card in non-patients and patients. Since the frequency of appearances is indicated in the tables, the tester can determine how ordinary or how unusual a certain response is. Recently, supplementary concepts of setting basic and core plots for this method have been proposed, with the former showing an appearance rate of about 70%, and the latter about 40%. The second feature is scoring by focusing on the pattern of the relationships among characters. This classification clarifies the type of relationship that the participant preferentially uses. The third feature is to use a comprehensive list that arranges aspects of personalities in order from abstract phase to concrete phase. The list is utilized for preparing integrated reports from the interpretation obtained by each card and helps the tester assemble an overall picture of the interpretation and confirm any excesses or deficiencies.

Key words: typological story plot, type of relationship, Thematic Apperception Test, projective method, assessment

TAT (Thematic Apperception Test ; 主題統覚検査) は、ロールシャッハ法と並んで長い歴史を持ち投射法心理検査の双璧とされるが、分析・解釈の方法が確立されているとは言い難い状況にある。そのような状況に一石を投じたのが鈴木睦夫 (1997, 2012) による手法 (以下、鈴木法と略す) であった。本稿では、鈴木が考案した分析・解釈の考え方や仕組みについて、鈴木の直接の教え子のひとりという立場から概観していく。また、鈴木法のさらなる発展のための一提案として、筆者なりの拡張案を紹介してみたい。本稿が TAT 全体や鈴木法をめぐる先輩諸氏の議論の一助になれば幸いである。

鈴木法では、およそ次のように分析 (特徴のみきわめ) と解釈 (特徴の意味づけ) を進めていく。筆者なりの補足も織り交ぜながら、簡略ながら段階ごとに説明していきたい。

第1段階は、共感的なアプローチである。ここでは、得られた TAT 反応 (逐語録) を、語り手 (被検査者) になったつもりで読み込んでいき、気がついたことを書き留めていく。また、主人公と思われる登場人物だけに検査者の心を重ねるのではなく、登場人物のそれぞれの立場から思いをめぐらせて物

語を追体験していく。このことは当たり前のようにも思えるが、TAT の開発を主導した Murray (1938, 1943) は、TAT 物語を主人公の視点から分析していく立場 (主人公仮説) をとっており、他の登場人物への語り手の同一化のありようについては、実のところあまり重視していない。他方、Piotrowski (1952) は「解釈のための9つのルール」のなかで、TAT 物語に登場するどの人物も語り手のパーソナリティのある側面を表現している (第2ルール) と述べている。鈴木法では Piotrowski の見解が採用されており、これは後述する関係相の考え方にも通底している。

さて、このように登場人物のそれぞれについて共感的に読んでいくと、語り手はそのカードで体験した感じ方や考え方がよく伝わってくる。その際、特に検査者が理解しにくかったりして違和感を抱かせた箇所については、語り手に固有な体験の内容や様式が表現されている場合が多いので、その旨を重要な分析情報として記録し、解釈につなげていく。

第2段階は、物語の要約である。語り手が使った言葉を用いながら、各カードで語られた内容について要約していく。時間がない等の場合には、逐語録の重要な箇所に下線を引いて、心に留めておくとい

う方法でもよい。このような準備によって、反応の特徴や構造が明瞭になる。将来的には、藤田(2001)が提唱する情報分析枠のような整理表があると初心者等に益するところが大きいかもしれない。

第3段階は、形式的な側面からの分析を通じた解釈である。先述の要約作業は、物語として欠けている部分や過剰な部分、さらには語り方の癖を浮かび上がらせるが、それらを形式面の特徴として特定し、解釈していく。鈴木(2012)は先行研究や自身の知見をまとめて、形式面のチェックリストとその解釈仮説を用意している。

第4段階では、鈴木法の中心となる、カードごとの物語類型の分析をもとにした解釈を行っていく。第1段階の共感的アプローチは、経験を積んだ者ならばかなりのところまでの解釈が可能であるものの、それでもやはり主観的であるとの批判を免れないだろう。そのような問題に対して鈴木法では、物語類型という基準を各カードに設けることで対応している。鈴木(1997)は、一般人といくつかの患者群から構成される膨大なTAT反応データから、各カードで得られた物語の筋(プロット)を分類して物語類型を特定し、その出現頻度を明らかにした。すなわち、あるカードでどのような物語が生じやすいかが詳細に把握されているので、分析ではどの類型に属するかを特定すればよいというわけである。しかも、その物語類型は階層構造をもっているため、類型同士の近縁関係が分かる仕組みになっている。したがって、ある1つの物語は全体の中に位置づけられ、他の物語との比較検討が可能になる。Rapaport(1946)がありふれた反応をクリシェ(cliche; できあいの物語)と呼んで注意喚起をしたとおり、あるひとりの語り手の反応だけを見て分析・解釈を行ってはならない。多くの語り手の一般的な反応傾向を踏まえて、はじめて客観的なアプローチが成立するのである。そのように考えると、出現頻度の高い類型に属する反応からは、語り手の個人的な特徴を推測することはできないが、他の人々と同じように感じたり考えたりできる常識性や公共性が備わっていることが分かるだろう。そして、出現頻度の低い類型に属する反応こそ、語り手に固有のものが反映されている可能性が高い。

たとえば、カード1における「バイオリンを認知し、少年に悩み・悲しみ・不安を見ている」反応は、鈴木によれば、非患者群の成人では8~9割で生じる類型であることが明らかになっている。したがっ

て、カード1での悩み等への言及は、決して極端な抑鬱や不安のサインではなく、語り手が悲哀や不安の感情に対して適度な反応性を有していることを意味する。逆に、「この男の子はバイオリンを発明した天才少年で、これでどんな音色が出るか、わくわく想像しているところ」という反応は、感情面で一般的傾向に大いに反しており、残りの1~2割に属する少数派の類型である。このような反応は、語り手の個人的な特徴が反映していると解釈でき、陰性感情に対して回避的で、反動形成的な表現をとりやすいと解釈できる。

こうして各カードにおける物語類型とその出現頻度が分かると、そこでの一般的な反応を基準にして解釈を進めることができる。さらに、鈴木(1997)は物語類型のそれぞれについての詳細な解釈仮説を用意しており、大変に役立つ。また、筆者のように比較的健康的な語り手の多い学校臨床領域等でTATを実施すると、病院精神科で出会う反応とは傾向が異なることにしばしば気づかされるものである。しかしながら、精神科領域や矯正領域のみでTATを用いていたらどうであろうか。鈴木法の物語類型は健康な人々の反応を土台に設定されているため、これを用いれば必ずと一般的傾向との比較がなされることになる。このことは、もっと強調されてよいし意識されなければならないことであろう。

ところで、鈴木(2012)は、「多種多様な物語が作られると言っても、たいていの場合、絵の基本的把握の仕方には共通性が認められるものです。筆者は、そういう、肉づけされる以前の絵の基本的な把握の仕方を 基本的統覚 と呼ぼうと思います」と述べている。この考え方に着目して、筆者はここで、基本反応と中核反応という考え方を提案したい。鈴木が示した物語類型はとても細かく分類されており、それは精密な解釈に役立つ一方で、そのためにかえって全体像が見えづらくなったり、この方法に近寄りたくしている面が少なからずある。そこで、鈴木の分類を土台にして、大学生における出現率が7割程度の物語類型を基本反応、同様に4割程度のものを中核反応として暫定的に設定してみた(Table 1およびTable 2を参照)。

基本反応とは、鈴木(2012)が基本的統覚と呼んでいるものに相当し、多くの人々に共通して認められる最低限の話の筋である。したがって、これを満たさない反応を多く産出する語り手は、パーソナリティになんらかの問題が顕著な特徴を有している

鈴木法を基盤とした TAT の分析・解釈 (関山 徹)

Table 1 TAT カード前半系列の基本反応と中核反応 (暫定版)

(% : 大学生男女を併せた平均)

カード	基本反応	鈴木 (1997)	中核反応	鈴木 (1997)
1	バイオリンを認知し、少年に悩みや悲しみ、不安を見ている	. i . (88%)	バイオリンをうまく弾けない悩み	. i . 1. (43%)
2	前景女性が中心的ないし一応の中心的な扱いを受けている	. & . (68%)	前景女性の内面叙述や特徴づけがある	. (44%)
3 BM	画中人物に悲嘆・苦悩を見ている	. (67%)	大切な人 (愛・依存の対象) との関係の破綻・消滅・その恐れ	. i . (38%)
3 GF	画中人物に悲嘆・苦悩を見ている	. (86%)	大切な人 (愛・依存の対象) から見放された悲しさ・悔しさ	. i . 1. (44%)
4	画中男女の間に意思の拮抗を認めている ("身の危険を顧みず男らしい、ないし男くさい行為をしようとする男と、彼の身を案じてその行為を思いとどまらせようとする女の物語", あるいは "男の愛情を要求する女と、女の要求に応じようとしなない男の物語")	. & . (78%)	(未設定)	
5	画中人物は部屋の主、あるいは部屋にいる (はずの) 人を目当てに来ており、恐怖・驚愕が述べられていない	. i . (76%)	部屋主への奉仕的意味合いの要件があって、あるいは部屋主を気遣っての来室	. i . 1. A. & . i . 2. A. (40%)
6 BM	深刻な事態を見ている ("相手が容易に受け入れ難い意思の表明を、画中人物の一方が画中人物の他方に行っているもの", あるいは "画中男性が対峙・対決している相手は画外にいるもの")	. & . (69%)	即座に受け入れがたい意思の表明がなされており、息子が母親に対し自分への願望や期待に背く訴えや申し出、あるいは背いたことの謝罪や償いの申し出をしている	. i . 1. (36%)
6 GF	画中男性の接近は、特に意図のない親愛の情からのもの、用事・用件のため、あるいは女性の心事を慮つてのもの	. ~ . (72%)	男性の接近は親愛の情から出たもので、女性の驚きは男性の予期せざる出現・ことば掛けに対する驚きにすぎない	. i . (41%)
7 BM	画中男性の二人が重要な事柄について真剣に話し合っている ("相互的な" 連帯意識・信頼関係のなかで二人が何かを企てているもの", "老いたほうは若いほうを自己の事業上の目論見・思惑に従わせようとするが、両者間に必ずしも信頼関係が認められないもの", "両者間に意志・感情・立場の対立が認められるもの", あるいは "若いほうへの老いたほうの協力・援助・支持が認められるもの")	. ~ . (86%)	老いたほうの男性に優位性が認められ、両者に相互的な連帯意識・信頼関係が認められないあるいは若いほうへの老いたほうの協力・援助・支持が認められない	. & . (38%)
7 GF	画中の成人女性の働きかけに対する画中少女の非受容 (反発や無反応など)	. (82%)	成人女性が勉強を教えるまたは教養教育として本を読み聞かせるが、少女は非受容を示す (但し特別な背景事情がない; わがまま・勉強嫌い・遊び欲求など)	. i . 1. (42%)
8 BM	画中の前景人物が、背景の手術・殺傷される人、あるいは手術・殺傷する人と関連づけられている ("前景人物がおもに背景の手術・殺傷される人と関係づけられている", あるいは "前景人物を背景の手術・殺傷する人と関係づけているもの、あるいは直接的に関係づけていなくても、手術・殺傷する側に位置づけているもの")	. & . (74%)	前景人物から手術・殺傷される人の苦しみ・痛みへの共感・共体験がある、あるいは前景人物にとって手術が自我親和的である 準中核反応 ("手術・殺傷される人の苦しみ・痛みに対する前景人物の共感・共体験があるもの、またはあると判断されるもの", あるいは "前景人物が背景の手術する人と関係づけられ、前景人物にとっては手術が自我親和的であると判断されるもの")	. i . & . i . 1. (55%)
8 GF	画中女性を絵のモデルとしていない	. (82%)	女性は、職業をもつ (あるいは志向する) 女性・主婦・恋する未婚女性	. i ., . ii . & . iii . (48%)
9 BM	画中男性たちの任務遂行の合間 (後) における休息	. i . (77%)	農牧従事者 (カウボーイや農夫など) をはじめとする作業労働者 (兵士・訓練生・保安官・森林警備隊・レインジャー部隊・旅行者・輸送隊・探検隊・狩猟者などを除く) の労働の合間 (後) の休息	. i . 6. (44%)
9 GF	画中人物の二人の立場に明確な違いがある	. (74%)	両者の個人的関係の性質が明らかにされている	. i . (29%)
10	悲しみが背景にある画中人物同士の抱擁、あるいは画中人物の二人による長年連れ添ってきた夫婦の愛の確認やいたわり合い ("悲しみが背景にある抱擁を見ているもの", あるいは "長年連れ添ってきた中・老年夫婦の愛の確認やいたわり合いを明確に述べて夫婦愛の陰影があるもの")	. & . i . 1. (81%)	恋人同士・夫婦を引き離す外的事情がある (あった) がための抱擁 (おもに別離や再会の抱擁)	. i . 1. A., . i . 1. B., . ii . 1., & . ii . 2. (44%)

Table 2 TAT カード後半系列の基本反応と中核反応 (暫定版)

(% : 大学生男女を併せた平均)

カード	基本反応	鈴木 (1997)	中核反応	鈴木 (1997)
11	画中に人物を見ている, あるいは (および) 人間を主体としている	. (63%)	人が竜 (怪物) の攻撃・襲撃に遭遇している, あるいは人が物理的障害・災害としての難所の通過・脱出に遭遇している	. i. 1. A. & . i. 2. A. (45%)
12 M	画中の横たわる病める人への他方の人物からの治療	. (80%)	治療の専門家による患者の治療 準中核反応	. i. (55%)
12 F	両者の間に相容れない敵対性・異質性を見ている	. (78%)	老婆を悪を表す存在としてとらえていえる (外在的ないし内在的に) 準中核反応	. i. 2. (56%)
12 BG	(未設定)		(未設定)	
13 MF	画中女性は死んでいる, あるいは画中女性は異常な状態ではなく, 画中男性が女性と寝た (これから寝る) 際の眠気・疲れを述べている	. & . i. (76%)	画中男性が女性を殺した, あるいは画中女性は異常な状態ではなく, 画中男性が女性と寝た (これから寝る) 際の眠気・疲れを述べている 準中核反応	. i. & . i. (57%)
13 B	大切な人 (物) の物理的ないし心理的不在による寂しさ・悲しみ	. (60%)	大切な人の物理上の一時的不在ないし心理的不在による寂しさ・悲しみ	. ii. (41%)
13 G	(未設定)		(未設定)	
14	現在の状況からの脱出が心理的ないし象徴的な次元で示されている, あるいは外の自然に接しての気分的快感が示されている	. ii. & . (68%)	(未設定)	
15	画中人物が罪悪感, 怨念・執念, ないし愛惜などの心理的不全感を抱いている (" 画中人物が罪を悔い改めているもの ", " 画中人物が怨念・執念を抱いているもの ", あるいは " 画中人物が親しかった人・愛していた人の墓を参っているもの ")	. , . i. & . (63%)	画中人物が罪を悔い改めている, あるいは親しかった人ないし愛していた人の墓参をしている	. & . (49%)
16	(未設定)		(未設定)	
17 BM	画中人物の移動の手段としての綱登り (降り), あるいは芸・技としての綱登り (降り)	. & . (88%)	(未設定)	
17 GF	絵に暗さ・不健全さを見ている 準中核反応	. (57%)	不吉・不健全な世界や社会の病める部分を見ているもの	. i. (41%)
18 BM	男性の身体に置かれた手を, 彼を束縛し, 自由を奪うもの手とらえている	. (65%)	男性は襲われている	. i. (38%)
18 GF	年配女性の行為を倒れた人への介抱・介助の行為ととらえている	. (74%)	介抱される人の死・瀕死状態に言及していない 準中核反応	. ii. (50%)
19	人々が住む家や乗る船を認知している	. (78%)	自然の猛威が問題となっている	. i. 1. (39%)
20	画中右下の男性が, 大切な人ないし物を喪失した, あるいは大切な人ないし物を予期・期待している (" 悩み・悲しみ・虚しさを抱く男性が無目的に佇んでいるないし歩いているとするもの ", あるいは " 男性は何らかの目的・期待をもってそこにいとみなされるもの ")	. & . (73%)	男性は基本的な拠り所 (家・家族・仕事) の欠落状態にあつて悩み・悲しみ・虚しさを抱えて佇んでいる (歩いている), あるいは男性は普通の意味での人待ちをしている	. i. 1. & . i. 1. (46%)

可能性が高いだろう。そして, 中核反応は, 基本反応の具体化 (肉づけ) の典型例と考えることにした。中核反応と比較して詳細な反応や特殊な反応は, ある種の洗練性ないしは特定領域へのこだわりを示す可能性が高いだろう。しかしながら, 特に中核反応についてはその意味づけにまだ曖昧さが残る点是否めない。また, 基本反応にしても中核反応にしても, どのくらいの出現頻度や分類が妥当であるか, たとえば Ritter & Eron (1952) の平凡反応基準などを

参考にしつつ, より詳しく検討していく必要もあるだろう。

さて, 第5段階は, 関係相による分析・解釈である。これは, 鈴木 (2012) が最晩年に提唱し付け加えた方法で, 「物語の分解と量化」の方向性をもったアプローチである。第4段階では TAT 反応の物語の側面 (特に筋) に着目するのに対して, ここでは TAT 反応における登場人物の他の人物や物事への関わり方に着目して, それを分類・記号化し, 集

Table 3 関係相のカテゴリー

Expl: 見 (知り) たいものを意図的に見 (知) る vs. Pas-F: 見たく (知りたく) ないものをたまたま見て (知って) しまう	Spo/Sav: 支援・救助 Prov/Ser: 供給・奉仕 vs. Harm: 侵害 vs. Dep: (物の) 剥奪
Expo: 自分を見 (知) られる・(見) 知られた vs. Conc: 自分を見 (知) られない・見 (知) られたくない	Like: 好感・愛着 vs. Hos/Disg: 敵対・嫌悪 Love: 性愛・執着 vs. LoL: 愛の欠如
Con/Coer: 統制・強制 vs. Ask/Req: 依頼・要求 Dec: 教唆 vs. Gui: 教導	Uni: 結合・融合 vs. Sep/Los: 分離・喪失 Pos-F: 向上・発展 vs. Neg-F: 衰退・没落

Table 4 パーソナリティ把握の枠組み一覧 (要約)

- ・ 対象とのかかわりの基本的な側面
 - i. 対象志向の面: 「意」
 - 1. 強弱や持続性
 - 2. かかわりを推進する欲求や衝動: 性愛, 攻撃性, 獲得欲求, 知的探求心, 等
 - 3. ありたい自己像・自我理想
 - 4. あるべき自己像・超自我
 - ii. 対象把握の面: 「知」
 - 1. 速さ
 - 2. 精しさ
 - 3. 客観性と正しさ
 - 4. 現実性
 - 5. 普遍性
 - iii. 対象への反応の面: 「情」
 - 1. 身体的基盤 (感受性)
 - 2. 基調気分
 - 3. 不安の高さ
 - 4. 反応統制の強弱
- ・ 人とかかわり方の一般的傾向
 - i. 対他者
 - 1. 他者に対する関心の強さ
 - 2. 他者に対する感情の性質
 - A. 肯定的 (与える / もらう)
 - B. 否定的 (支配 / 破壊)
 - ii. 対自己
 - 1. 内界に対する関心の強さ (内向性)
 - 2. 自己に対する感情の性質と対他者定位
 - A. 自己に対して肯定的: 対他者優位 / 対他者等位
 - B. 自己に対して否定的: 対他者劣位 (能力・美・倫理)
 - 3. 自己の統合度 (統合 / 分裂)
 - 4. 自己開示性: 自己開示的 / 自己閉鎖的
 - iii. 自己像 (現実自己 / 理想自己)
- ・ 対象別のかかわり方の傾向
 - i. 対家族
 - 1. 家イメージ
 - 2. 親: 愛情体験・自立性
 - 3. 父親: 父性体験・父親に向ける感情・自立性
 - 4. 母親: 母性体験・母親に向ける感情・自立性
 - 5. 同胞: 競争心・同輩集団への適応力
 - ii. 対異性
 - 1. 性的同一性 (確立・堅固 / 未確立・脆弱)
 - 2. 異性に向ける感情 (肯定的 / 否定的)
- ・ 人間生活における重要な事物・事象へのかかわり方
 - 性愛, 死, 古い・病, 仕事・任務, 権威, 地位・身分・富, 悪・犯罪, 自然, 美
- ・ 病理的問題
 - 希死念慮, 強迫傾向, 不安・恐怖症的傾向, 妄想傾向, 薬物嗜癖, 離人症

計していく。このような作業によって、語り手の日常生活における関係様態の特徴が推測できると鈴木は考えたのである。関係相は6つの大カテゴリーから構成されており、それぞれには下位のカテゴリーが設けられている。詳細はTable 3に示したとおりであるが、下位カテゴリーの多くが相反する関係様態の対になっている点の特徴である。これには、「相反するものは、同じ軸の両極端に位置し、相通じるものがあり、反応解釈の際には考慮されるべき」だという鈴木のお考えが反映されている。

集計された関係相は、それぞれについて成人男女各50人の出現率が示されているため、それとの比較ができるようになっている。しかしながら、各カードにおける出現率が示されておらず、その値を基準とするためには、鈴木(1997)の21枚系列で施行する必要がある。また、大カテゴリー・・・は、他の大カテゴリーと比較してやや異質であり、整理・統合する余地があるように思える(関山, 2012)。とはいえ、関係相によるアプローチは、語り手の関係様態の概観や構造把握を容易にしてくれるため、今後の活用が大いに期待されよう。また、実際のTAT反応では、主人公が曖昧な反応も多々存在する。このような反応に対して、Murrayの欲求-圧力分析では主人公仮説をとるために、主人公の特定の仕方によっては、欲求と圧力の分類結果が他の場合と逆転する問題が生じてしまう。関係相分析では、関係の方向性は問わないので、そのような問題は存在しない。

細かいことになるが、関係相の記号の表記は、鈴木が記号だけを記すのに対して(例: Spo/Sav)、筆者としては、大カテゴリーの番号も併記する方法をおすすめしたい(例: . Spo/Sav)。この方法のほうが、集計する際に語り手の関係相の全体的傾向を視覚的につかみやすく便利だからである。

最後となるのが、第6段階である。それぞれのカードについての解釈が済んだら、それらを全体としてまとめていく。その際、多くのカードで引き出された同じ解釈内容は、信頼性の高いパーソナリティ特徴であると言えよう。このような作業にあたって、鈴木(1997)の「パーソナリティ把握の枠組み一覧」は有益なツールである。要約したものをTable 4に示したが、上部から下部にむかって順に、抽象(心の基本機能)から具象(生活場面での現れ方)へと配置され、パーソナリティ特徴が網羅的に把握できるように工夫されている。このような一覧表を用

いると、語り手の全体像に気を配ることができ、解釈が疎かになっている側面やTATでは捕捉できなかった側面の存在にも気づくことができるだろう。

TATは、語り手の体験している世界を簡単な道具で追体験できる優れた心理検査であり、心理面接の機微にも共通するものを多く有している。しかしながら、その実力ほどに活用されているとは言い難いのも事実である。鈴木はこの世を去る前日までTATの研究に取り組み、物語類型分析に加えて関係相分析にも踏み込んでいった。私たちは、鈴木が残したものをただ守るだけでなく、時にはその再構築をいとわず果敢に発展させていかなければならないだろう。

附記

本稿は、2018年11月18日に中京大学で開催されたTATパーソナリティ研究会第150回記念大会における講話をもとに加筆・修正したものである。

文献

- 藤田宗和 2001 TATの情報分析枠 (the Frame of Information Analysis) の提案: プロトコル分析のための新しい枠組み. 犯罪心理学研究, 39(29), 1-16.
- Murray, H. A. 1938 Explorations in personality. New York: Oxford University Press. [外林大作(訳編) 1961 パーソナリティ・・・誠信書房]
- Murray, H. A. 1943 Thematic Apperception Test manual. Cambridge: Harvard University Press.
- Piotrowski, Z. A. 1952 The Thematic Apperception Test of a schizophrenic interpreted according to new rules. Psychoanalytic Review, 39, 230-240.
- Rapaport, D. 1946 The Thematic Apperception Test. In Rapaport, D. Diagnostic psychological testing, Vol. 2, Chicago: Year Book Medical Publishers. 395-459.
- Ritter, A. M., & Eron, L. D. 1952 The use of the Thematic Apperception Test to differentiate normal from abnormal groups. The Journal of Abnormal and Social Psychology, 47(2), 147-158.
- 関山 徹 2013 TAT (主題統覚検査). 八尋華那雄監修 臨床心理学の実践: アセスメント・支援・研究. 金子書房. 83-104.
- 鈴木睦夫 1997 TATの世界: 物語分析の実際. 誠信書房.
- 鈴木睦夫 2012 絵解き法 (TAT) のすすめ: 新たな分析・解釈法の導入. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 12, 11-159.